新興国ウォッチ！　＜第 22 回＞

国際収支（6）

多田　忠義

ブラジル経済を発展段階説で検証

今回は、ブラジルを取り上げ、貿易収支、所得収支、対外純資産の推移を追う。

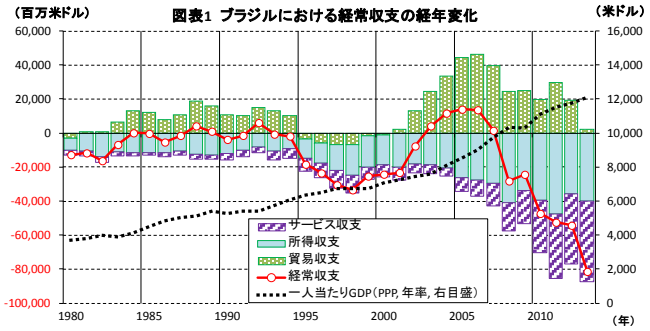
ブラジルの人口は約 2 億人、一人当たり GDP が 11,000 米ドルを超える上位中所得国（2012 年世界銀行の区分）で、豊富な天然資源に恵まれ、米国や欧州などの消費地に比較的近いことで、資源・農産物輸出にとどまらず、工業製品の輸出も盛んである。第 2 次世界大戦後は輸入代替化政策のもと、政府系、外資系、民族系の企業が足並みをそろえて工業化を支えた。その後、債務危機や通貨危機を経て経済自由化に舵を取り、2000 年代前半の好調な世界経済や中国等の新興国が台頭したのを背景に、一次産品だけでなく半製品や工業製品の生産・輸出も盛んとなっている。かつて物価スライド制（インフレ率をもとに賃金・消費財価格を調整する制度）を導入していたことから、高インフレに悩まされ続けた。現在、金融政策の運営手法はインフレ・ターゲット（目標は 4.5±2.0%）に移行しているが、低い労働生産性と高い賃金上昇率で高インフレ体質から抜け出せていない。

輸出先の経済減速と高止まりするインフレ･レアル高が経常赤字を招く

ブラジルの主要輸出相手国は中国、米国、アルゼンチンで、この 3 国だけで金額ベースで 4 割弱を占める。それゆえ、2000 年代前半の緩やかな景気拡大期では順調に輸出を伸ばすことができたものの、リーマン・ショックや、中国経済の成長率鈍化などに伴い、輸出は減少した。一方で、ブラジル国内の中間層による内需はより一層高まり、消費財、中間財、耐久財の需要が高まって、輸入やサービス（機械の賃貸料など）が増加し、赤字を招いている。また、長引く高インフレとレアル高で、海外旅行が増加し、経常赤字を長期化させつつある。外資の現地法人から利益・配当などの送金が拡大し、所得収支も赤字が拡大している（図表 1）。一時的に経常収支は赤字から脱却できたものの、再び赤字となっているが、依然として海外からの直接投資が活発であり、対外純資産のマイナス幅は高止まりしている（図表 2）。

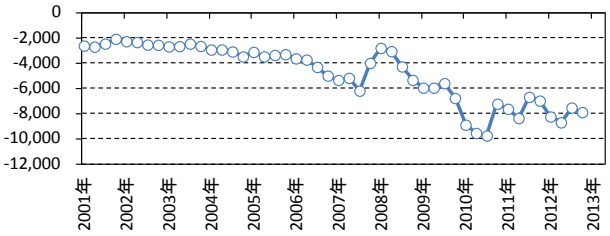
クローサーらの発展段階説に従えば、ブラジルは「Ⅳ　未成熟な債権国」に達したものの、内需拡大のペースや海外経済の変化スピードが産業構造の転換スピードを上回り、再び貿易赤字、経常赤字になった国といえる。グローバル経済、通信・輸送スピード向上によるめまぐるしい社会構造変化が、発展段階を大きく変えつつあることを気付かせてくれる。

図表1　ブラジルにおける経常収支の経年変化



（資料）Thomson Reuters Datastreamより作成（ブラジル共和国中央銀行「国際収支」、IMF WEO「購買力平価、2005年基準、一人当たり実質GDP」）

図表2　ブラジルにおける対外純資産



（資料）Thomson Reuter Datastream（ブラジル中央銀行）より作成

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載･複製を禁じます